

「あいだ」と「わたし」  
—暮らしにおける共創の場を描き出す—

Considering “Aida” and “Watashi”  
—Portraying Everyday Life as a Co-creating Ground—

桑山 菊夏\*<sup>1</sup>  
Kikuna Kuwayama

諏訪 正樹\*<sup>1</sup>  
Suwa Masaki

\*<sup>1</sup> 慶應義塾大学環境情報学部  
JFaculty of Environment Information, Keio University

We encounter with others and feel “Watashi” (have the sense of oneself). As we describe an occasion in words, we recognize our circumstances and ourselves with interaction between. We call it the experience of “Aida”. The purpose of this paper is to give a description of the experience of “Aida”. The first author tries to describe various situations in the daily life and interpret the experiences of description, using some figurative expressions. We can understand the experience of “Aida” as a dialogue to know oneself and things around. The attitude of describing everyday scenes when we can do leads to the awareness of co-creation.

## 1. 問い

「間合いをつくる」という言葉が日常生活で使われる。近年、「間合い」に焦点を当て、人間の知の姿をあぶり出そうとする動きがある。

以下は、日本認知科学会研究分科会「間合い—時空間インタラクション」ホームページからの引用である。

間合いは日常生活に溢れている。例えば、対戦型のスポーツ(野球, サッカー, 柔道, 剣道, 空手, 柔術など), コミュニケーション(会話, プレゼンテーション, 交渉など), 舞台演技, 楽器演奏, 介護・看護の場においては、適切な間合いをつくりだすことが求められる。間合いは、時間の流れのなかで、空間的な位置関係に立脚して、絶え間なく生起するインタラクティブな現象であると考えられる。

我々は、周りにいる「誰か」(擬人化表現。モノ, 場所なども含む環境)とのさまざまな「間合い」をつくる。わたしたちはその場で「あいだ」をつくり出すことをよく体験している。「あいだ」をつくる行為は人間の暮らしの中に溢れ、人間のさまざまな営みにおいて重要な役割を果たしている。しかし、その姿は未だ曖昧である。

また、発達心理学において、他者との関係の中の自己の意識を含む情動的な経験が自己と他者への気づきを生み、徐々に自己の概念が形成される[Reddy 2008, 佐伯訳, 2015]という理論が提唱されている。情動的な経験があつてこそ、「わたし」を感じられるのである。この考え方から、他者との「あいだ」をつくり出すことが「わたし」をつくり出すことを生み出すと解釈できる。

本稿における問いは、「あいだ」をつくり出し、「わたし」をつくり出す行為がどのように体験されるのかということだ。

ある具体的な「あいだ」は、そのときその場で、その人にしか体

験できない。そのかけがえのなさこそが第一著者が「あいだ」に価値を置く理由であり、「あいだ」の体験について「わかった気になれない」理由でもある。

本稿は、さまざまな「あいだ」をつくり出し続ける過程、その体験自体について紐解こうとする第一著者の模索の一部である。少しでも「わかった気になる」ことを試みる中であらわれてきた、「あいだ」をつくり出す体験についての第一著者の解釈を取り上げて論じる。

第一著者の模索は、「誰か」とわかりあい、「仲良く」生きること方向づけられた第一著者の興味に基づいている。「わたし」は環境との「あいだ」によって形づくられる。「あいだ」をつくり出し続けることで、「わたし」の状態、ありようは常に変わりゆくように見える。「わたし」が世界とより良く生きるには、「わたし」はどうすればいいのか。「わたし」が「わたし」や環境をつくり出す源はいったい何であるのか。「あいだ」の体験そのものを問うことに、この源について解きほぐすための手がかりがあると考える。

## 2. 手立て

### 2.1 一人称研究

本研究は、第一著者による一人称研究 [諏訪 2015] である。一人称研究[諏訪 2015]は、一人称視点の個別具体的状況を記述し、人間の知の側面を明らかにしようとする研究手法である。

本研究において一人称視点をを用いるのは、「わたし」の体験する「あいだ」に関心を置いているためである。

本稿で述べる「わたし」は、そもそも自分を称する一人称としての「わたし」である。「わたし」、「あいだ」という言葉にかぎかっががついているのは、それらがある決まった形で存在するというより、その時その場である人の視点から他と区切られ、つくりだされるという前提に立つためである。

「あいだ」を捉える眼差しは、何かしらの表情を帯びている。「わたし」の主観が含まれ、「あいだ」の捉え方を大きく左右する。ある人の体験を評価する視点は様々な可能性が考えられるが、本研究では環境に目を向ける「わたし」の主観を含んだ体験を記述することを優先し、一人称視点をを用いる。

したがって、本稿においては、第一著者の視点から認識できる「誰か」つまり「あいだ」の要素としての環境に関する記述にとどまり、「わたし」を含んだ世界の全体、ある「ひとり」の体験についての記述に向かう。

## 2.2 言葉にすること

本稿では、生活の中で「わたし」が「あいだ」をつくり出す体験について、第一著者の一人称視点で記述する。

体感を言葉にしようとするのは環境の要素や位置関係、そして身体などの無自覚になりがちなモノ(客観的に観測できる事実)に目を向け、言葉にすることで自分なりの意味を持つコト(主観的な解釈や経験)と繋げることである。これは、新たなモノ世界>そして新たなコト世界>と出会うことを促す[諏訪 2016]。

このように、体感をできる限り言葉にしようとする「からだメタ認知」[諏訪 2016]は、身体的な学びのメソッドとして提唱されている。

第一著者はよく、日常の中のさりげない出来事での気づきを言葉にする。ふと「どうして今こうしているのか」など意識を持ち上げ、感じ方や行動を変えられないかと探してみる。何かを言葉にしてみることで、他者との関係の中にある「わたし」のあり方を再考し、つくり出そうとする。このような日常における実感から、言葉にしようとするのは第一著者が「あいだ」をつくり出すことと大に関わっていると考える。この行為について「何をしているのか?」と不思議に思い模索しようとした結果、本稿の考察が生じている。

体感を言葉にし、「腑に落とす」ことに関心を置いてきたからこそ、その体験自体についても言葉にし「腑に落とす」ことを、第一筆者は試みてきた。本稿における模索は、第一著者自身による、以下二つの「言葉にすること」によって為される。

### (1) 「あいだ」をつくり出す

そのときその場の「あいだ」を形にして残すため、暮らしの何気ないシーンで感じることや気がついたことのうち「書き留めておこう」と思うことを記述する。

記述の長さや方法については特に制限を設けていない。手書きのメモやスマートフォンなどを利用し、その場で意識に上ることをできる限り書き留める。

### (2) 「あいだ」をつくり出す体験を言葉にする

(1)の出来事の言語化体験を続けつつ、「あいだ」について問い、言語化する。「あいだ」をつくること(言葉にすること)という概念を、主にメタファーを用いて表現する。

第3・4節で述べるのは、第一筆者が「あいだ」をつくり出す体験について言葉にしたものである。

## 3. 「対話」: 学びを促すこと

第一筆者が日常的に行っている「からだメタ認知」、つまり体感を言葉にしようとするのは、いったいどんなことなのだろうか。

第一筆者は、体感を言葉にしようとするのは「対話」と例える。

ここで述べる「対話」のメタファーは、自己再帰性 [北村 2013] を伴うエスノグラフィーの手法から着想を得ている。自己再帰的手法を用いるライフストーリー研究における「対話」について、小倉[小倉 2012]は『学知と現実が分かれていく以前の経験的土壌』に降り立って異化しあう生成的コミュニケーションと呼ぶ。

このような考え方を第一筆者が解釈し、「観察者」と「観察されているもの」の関係ではなく、さまざまな「あいだ」によって象られる「わたし」自身、そして「わたし」、「誰か」を見つめて価値を見出そうとすること [桑山・諏訪 2016]を、本稿においては「対話」と呼ぶ。

人でなくとも、相互作用に注目して「対話」することで「わたしを見つめる」こと、新たな「わたし」に出会おうとすることができるように感じる。これが、「対話」することによって「あいだ」をつくり出すことである。

「対話」は「耳を傾ける」と「吐き出す」という二つの行為で促すことができる。

まず、「耳を傾ける」ことは、小さな響きも逃さないように「あいだ」を聴こうとするということを示す。

何を、どのように感じているのかという自らの姿を吟味し、少しでも確かめようと注意を払う。それは「わたし」そして「わたし」の感じる「誰か」の奥底にある声を聴こうとするかのように、慎重に観察することである。

そして、「吐き出す」ことは、なるべく率直に、熱のこもった言葉を紡ぐことを示す。意味を伝えるための整った形でなくとも、言葉になりきれないもやもやとした気持ちを親しい人に吐露するように、とにかくまずは率直に表現してみることである。

瀬戸[瀬戸 1995]によると、メタファーとは「対象 A を B と見る」という「見立て」である。第一筆者が「あいだ」をつくり出そうとするときには、辞書の意味と一致した言葉に留まらず、そのときその場の体験をなぞらせるように、表現するにふさわしいと思う言葉を選ぼうとすることに価値を置いている。

そして「わたし」の言葉には、「わたし」自身が滲み出ている。レイコフら[Lakoff&Johnson 1980, 渡部他 訳, 1986]によると、「どのようなメタファーも、その経験上の基盤から切り離しては理解できないし、また切り離せば適切な表現ともなりえない」という。「吐き出す」言葉には「わたし」が体験してきた「誰か」との「あいだ」が現れる。これまで体験した「あいだ」も含め、「わたし」の生きてきたことが、言葉という形を生み出す力の元にある「熱」になっている。筆者が「吐き出す」という言葉を用いるのは、胸の中にある息を外に吐き出すように「わたし」の持つ「熱」がこもった言葉を発する行為であるという意味も込めているためである。

「耳を傾ける」、「吐き出す」という二つの行為が、第一筆者にとっての「あいだ」をつくり出す体験において重要なものとして感じられる。

## 4. 学びの過程についての解釈

本稿で述べる「あいだ」をつくり出すことを表現するもう一つのメタファーは「うつつあい」である。

この「うつつあい」という言葉は、第一著者が、「感性が育まれる」体験をしたときに自分に起こっていることを表そうとした絵(図 1)に基づいている。他者や芸術作品とのやりとりによって人間としての何かを学んだり、何かをできるようになったと感じたりした体験について描いたものである。

したがって、「あいだ」をつくり出そうとする「対話」を行い、第一筆者にとって良い「あいだ」がつくり出された体験について、感じられることを形として表現しようとしたものと言える。

「うつつあい」の図は、「うつつとる」と「うつつ出す」ことから成るようにもみえる。「うつつとる」とき、環境から「より良い姿」をうつつとり、自らに描き出す。その姿を自分で選びとり、自分に描き出す。自分に移された像は、そのときどきの自分によって変わる。「うつつ出す」とき、自分から染み出してきた何かによって、環境を描き出している。「ごちゃ混ぜ状態」の自分から染み出してくるものを使って、自分なりの形を与える[諏訪研究室 2015]。

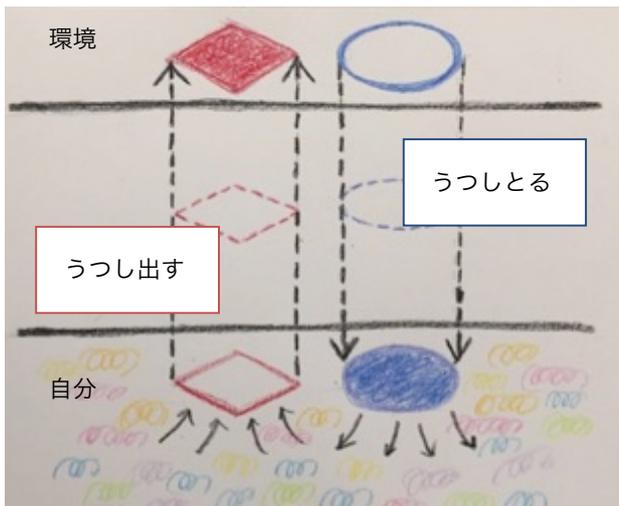


図1 「うつしあい」

「うつしとる」こと、「うつし出す」ことは、すでに述べた「耳を傾ける」、「吐き出す」とも似ている。第一筆者が「感性が育まれる」と感じた体験について描いたこの図は、「あいだ」をつくり出すことができたとき、つまり「対話」をおこない、「わかり合えた」ときの体感を示しているとも言える。

「あいだ」をつくり出すことを示した表現の一つであるこの図に関して、注目したいのは、図の下部分、「わたし」に起こる変化の体感が描かれている点である(図2)。

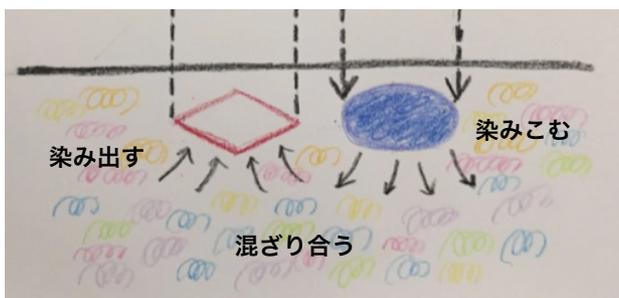


図2 「混ぜり合う」

・「染みこむ」

うつしとり、自らにうつし出した「姿」は、そのときの自分によって異なる。そして、その自らにうつし出した「姿」が「染みこむ」が、そのまま消えてしまう。記憶に残らないようでも、自らに描いた「姿」は自分に何かしらの変化をもたらしていることがある。

・「染み出す」

それまでに自分に「染みこんだ」色が混ぜり、「染み出す」。この「染み出した」何かが「うつし出す」ための源である。

・「混ぜり合う」

自らに「染みこんだ」色は、「ごちゃ混ぜ」状態で広がりがある自分の中に混ぜてしまい、見えなくなる。しかし、今まで出会った「誰か」から「染みこみ」、混ぜり合った色が「うつしとる」ときに自分に描かれる「姿」に影響し、「うつし出す」ときに「染み出す」源になる。

図の「染みこむ」、「染み出す」、「混ぜり合う」という表現に関してここで述べたいことは、「うつしあい」を繰り返してきたその流れ、歴史がそのときの「わたし」の状態をつくり出し、その状態によって「うつしあい」の状態が変化するという点である。このとき描い

た「ごちゃ混ぜの自分」の変化は、共通感覚[中村 2000]の概念と関連していると筆者は解釈している。共通感覚とは、「いわゆる五感に相対たりつつそれらを統合して働く総合的で全体的な感得力」のことである。

共通感覚には身体的・感覚的なものを言葉に統合する働きがあり、共通感覚をよく働かせることによって、「語の自由な選択と結合による自由な言語活動」が促される[中村 2000]という。

「自由な言語活動」を行おうとすることは、「わたし」が「対話」を繰り返し「あいだ」をつくり出そうとすることに近いと解釈している。さまざまな「対話」を通して言葉についてのメタファーや連想を行うことができるのは、言葉を紡ぐ源としての「共通感覚」が変化してゆくためではないだろうか。

感覚・感情もまるごと含めた「わたし」が「うつしあう」ことは、共通感覚をいきいきと働かせ、「わたし」をよりよくつくり出すことであると第一著者は解釈している。

## 5. おわりに

ここまで、「あいだ」をつくり出す行為がどのように感じられるか、第一著者の解釈を「対話」と「うつしあい」という二つのメタファーを用いて述べた。第一著者は、日常生活でふと気が付いたときに、「耳を傾け」たり、「吐き出し」たり、「うつしあい」を試みたりする。二つのメタファーが、ふと染み出すように現れ、第一著者が日常で「あいだ」をつくり出す入り口になってくれるように感じられる。

本稿の結びとして、暮らしの中で「あいだ」をつくり出すことの意義について、第一著者が感じることを述べる。「言葉にすること」の姿を解釈し、「あいだ」について模索する中で生まれた、「あいだ」の模索についての期待である。

### 5.1 共創の場を自覚する

前節で述べた解釈から、さまざまな「あいだ」をつくり出した体験が、「染みこみ」、「混ぜり合う」という考え方を生む。「わたし」の姿が感じられるとき、それはさまざまな「あいだ」から「染み込む」色の混ぜり合ったものではないだろうか(図3)。

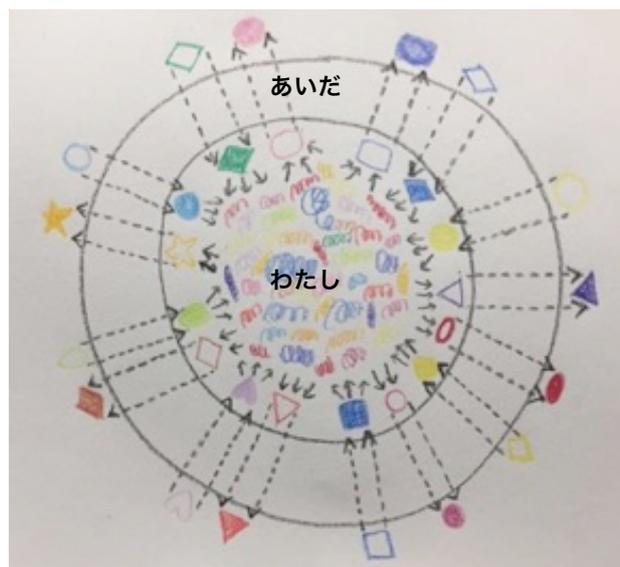


図3 「あいだ」と「わたし」

「わたし」が「あいだ」をつくり出すことは、「わたし」の色を豊かにしてくれる。「わたし」や「誰か」の姿に気づき、良く「あいだ」をつくる「わたし」を形作る。

第一著者が改めて強調して述べておきたいのは、生活は「あいだ」つまり「わたし」をつくり出し続ける共創の場であるということだ。生きることは「わたし」が学び続けることだ。「あいだ」についての模索は第一著者にとってはつい無頓着になってしまいがちな、この共創の場を改めて描き出し、再認識させてくれた。

明日も生きていくという不確かな前提のもとに、望みを抱く。生活の先に夢をみる。望みが叶えられないとき、悩み、苦しむ。もどかしさ、情けなさ、嫉妬を抱える。それでも生きようとする。そして問いかける、「わたしはどのように生きていくのか」。

「あいだ」をうまく保つことができず、思い悩むとき、第一著者はひとりできているようで「つらい」と感じる。「もっと〇〇できたらいいのに」と思うのである。

「いま、ここはどのようにあるのか」そして「どう動くのがいいのか」と問うこと、「あいだ」をつくり出そうとすることが、少しずつ望みを叶えてくれることがある。望みが叶わなかったとしても、少しでも対話を試みることで、「わたし」にしか体験できない学びが生まれる。

「あいだ」をつくり出す共創の場、何気ない生活の中には、ときにふと湧き上がる生きづらさとつき合うための、そして生きがいを探るための手がかりがある。

## 5.2 「熱」を感じる

「あいだ」を模索して「わたし」をつくり出すことが、共創しながら生きることである。

そして「わたし」が良く生きることは、「わたし」を含んだ世界の全体を調和させて描こうとすることであると考えられる。第一著者が関心を寄せる、「誰か」とわかりあい「仲良く」生きることは、このことを示している。

調和した「あいだ」を描く源とはいったいどのようなものなのか。この問いの答えは、本稿の考察では未だ仮説すら述べるできない。

ただ、「あいだ」をつくり出す、その力を生み出すものとして第一著者が重んじている概念について言及しておく。

それが、「吐き出す」ときに含まれる「熱」である。筆者が述べた「あいだ」をつくり出す対話は、言い換えるなら、「誰か」の持つ響きや熱のこもった声をできる限り感じ取ろうとし、「わたし」の熱を含んだ形を与えるということである。

「誰か」との互いの体温のこもったやりとりが、「わたし」と「誰か」をつくり出している。第一著者が望む調和は、「熱」を尊ぶことの中にこそ生まれるように思われる。

## 参考文献

- [北村 2013] 北村文: 自己再帰性, in 藤田結子, 北村文(編) 現代エスノグラフィー: 新しいフィールドワークの理論と実践, pp.30-33, 新曜社, 2013.
- [桑山・諏訪 2016] 桑山菊夏, 諏訪正樹: 他者との対話をとおして「わたし」を見つめる, 人工知能学会第 30 回全国大会, 2L4-OS-26b-3in2, 2016.
- [Lakoff&Johnson 1980, 渡部他 訳, 1986] Lakoff, G. & Johnson, M.: Metaphors we live by, The University of Chicago Press, 1980. (邦訳: 渡部昇一, 楠瀬淳三, 下谷和幸訳「レトリックと人生」, 大修館書店, 1986.)
- [中村 2000] 中村雄二郎: 共通感覚論, 岩波書店, 2000.

[小倉 2012] 小倉康嗣: 学知と現実のはざまでの愚直な対話—特集にあたって—, 日本オーラル・ヒストリー研究, Vol.8, p.57-61, 2012.

[Reddy 2008, 佐伯訳, 2015] Reddy, V.: How infants know minds, Harvard University Press, 2008. (邦訳: 佐伯胖訳, 「驚くべき乳幼児の心の世界」, ミネルヴァ書房, 2015.)

[瀬戸 1995] 瀬戸賢一: メタファー思考, 講談社, 1995.

[諏訪 2015] 諏訪正樹: 一人称研究だからこそ見出せる知の本質, in 諏訪正樹, 堀浩一(編著): 一人称研究のすすめ—知能研究の新しい潮流, pp.3-42, 近代科学社, 2015.

[諏訪 2016] 諏訪正樹: 「こつ」と「スランプ」の研究—身体知の認知科学, 講談社, 2016.

[諏訪研究室 2015] 諏訪研究室一同: ぬま—感性開拓について本気出して考えてみた—, 慶應義塾大学諏訪正樹研究室発行, 2015.